

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 3月31日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21730168

研究課題名（和文） 文明観としての経済思想の変容：J. S. ミル、シジウィック、ケインズを通じて

研究課題名（英文） The transformation of economic thought as a perspective of civilization: J.S. Mill, Sidgwick and Keynes.

研究代表者

中井 大介（NAKAI DAISUKE）

近畿大学・経済学部・准教授

研究者番号：70454634

研究成果の概要（和文）：本研究では、J. S. ミル、ヘンリー・シジウィック、ケインズらを軸としながら、19世紀半ばから20世紀にかけての経済思想の変容を、一次文献および二次文献を精査しながら追求した。経済思想を1つの文明観と捉える場合、現代経済学の理論的アプローチよりも、むしろ単に経済学者ではなく同時に哲学者でもあった本研究が対象とする人物たちの思想的・哲学的アプローチが極めて有効であると考えられる。こうした観点から、下記のような各種学術報告や学術論文等を通じて研究成果を公表した。

研究成果の概要（英文）：This study tried to clarify the transformation of economic thoughts from middle nineteenth to twentieth century through the examination on wide-ranging primary and secondary documents by the likes of J.S. Mill, Sidgwick and Keynes. They were not only economists but also philosophers. And when we regard economic thoughts as perspectives of civilization, their philosophical approaches would be much effective as compared with theoretical approaches of contemporary economics. From these points of view, the author published the following academic papers and made academic presentations as the research products.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総 計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学説・経済思想

キーワード：経済思想

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始以前の状況

本研究は、それまでの報告者のシジウィックに関する研究をベースとし、その延長線上に位置づけられる。そこで、まずは本研究開始以前の状況を概観しておくことにする。

現代においてシジウィックは倫理学者・功

利主義者として知られている。しかし彼の学術活動全体を鑑みるならば、倫理学、経済学、政治学へと軸足を移しながら、三つの学問を柱とした哲学体系の構築を目指していた様子が窺われる。近年ではシジウィックの経済学に注目が集まりつつある。例えばバクハウス(2006)は、シジウィックがマーシャルやケ

ンブリッジ学派の形成に与えた影響について注目する。またシジウィック研究全体を前進させる契機となったのは、2004年のシュルツによる大著の刊行であり、同著では人物像や交友関係も丹念に追求しながら、包括的なシジウィックの知性史が描かれている。

こうした趨勢に対応しながら、報告者は彼の経済学が倫理学や政治学とどのような関係を有するのかを検討してきた。その結果、次の3点が明らかとなった。第1に、シジウィックが倫理学において検討した人間性や倫理の問題が、彼の経済学や政治学においてその人間観として铸込まれることになった点である。シジウィックは利己主義と功利主義の方法が、望ましい個人の行為とみなせうと結論付ける。これは両義的結論とされる場合もあるが、彼の社会科学においてその積極的な役割が見出されることになる。すなわち、利己的な幸福追求と利他的な幸福追求の対立を調停する政府の役割が不可欠であるという確信を彼は抱くことになった。

第2に、彼は経済学に倫理学や政治学との内的関係を持たせながら、3つの学問分野を軸とした哲学体系を構築しようとした点である。利己主義の方法は、単に利己的な快樂追求ではなく、慎慮を軸とした合理的な幸福追求を指す概念である。経済学でシジウィックは合理的な利己心に基づく個人の活動が、社会全体の幸福最大化の原動力であると論じた。これは経済学の伝統的見解であり、ここに自らの倫理学研究を重ね合わせ、シジウィックは個人主義を擁護したのであった。彼は19世紀後半の不況下で、公共財の提供などの一定の社会主義的介入が望ましいと論じる一方で、政府介入や再分配政策等のもたらす弊害についても警鐘をならすのである。最終的に彼がバランスのとれた方針を示すことができたのは、倫理学研究を基礎とした体系的な哲学観がそこにあったからである。

第3に、彼の学問体系を全体として方向付けるのが功利主義だという点である。それは最大多数の最大幸福を軸とする、ある意味客観的な価値基準である。とはいえ、幸福とは何であり、どのように把握や計算が可能なのかといった点に、従来から疑問の目が向けられてきた。さらに重要なのはロールズによって鋭い批判を受けた部分、すなわち結果として全体の幸福の最大化を望ましいと見なすことは、そのプロセスにおいて一部の人の幸福や権利の犠牲を正当化しかねないという点である。とはいえシジウィックは、恣意的な価値判断を避けるために、あえて功利主義を選んだと考えられるのである。

(2) 経済学の現状と経済思想

報告者の研究は19-20世紀を対象とした歴史研究であるが、それは現代的な問題関心に根差すものである。経済学は歴史的に道徳科

学の1部門と見なされていた。近年の研究では、スミスの『国富論』と『道徳感情論』の間には密接な関係があることが注目されている。またミルも単に経済学者ではなく哲学者と呼ぶに相応しい人物である。

しかし19世紀後半以降、経済学は独立した科学と見なされるようになっていく。限界革命を契機として、経済学は数学的手法を導入し、精緻な科学としての地位を確立していく。現代経済学もこの延長線上に位置づけられ、洗練された理論的・統計的手法を駆使し、経済事象の解明が進められている。これは大きな躍進であったが、同時に経済学は哲学や倫理学などから切り離されることになった。スミスやミルの経済学への取り組みは、思想的・哲学的なアプローチと呼びうるものであった。経済という社会の「豊かさ」の問題に取り組む際、幅広い視野を持ったこれらのアプローチには、現代の理論的・数学的アプローチとは異なるメリットが備わっていると考えられる。こうした認識に立つならば、ミル、シジウィック、ケインズは、現代の私たちに有意義な示唆を与え得る存在である。

2. 研究の目的

以上の経緯から、新たな課題が浮上することになった。すなわちシジウィックの経済思想をさらに掘り下げて検討し、その特徴を他の経済思想と比較することで明確化する必要性などである。こうした経緯から本研究の着想が得られることになった。すなわち、ミル、シジウィック、ケインズを軸としながら、19世紀半ばから20世紀にかけての経済思想の変容を明らかにするという課題である。

(1) J.S.ミル

ミルに着目する理由は、第1にミルは古典派経済学として完成者と目される一方、彼の経済学には経済社会の将来像に関する哲学的論究が含まれている点である。19世紀半ばにイギリス経済は絶頂期を迎えたが、そこには経済成長から取り残された人々も存在した。ミルはこの光と影の両面を見据えながら、経済社会の将来性の展望を示そうとした。彼は現状の労働者階級は教養ある状態にはないとし、時にその振る舞いに辛辣な批判を加える。しかし、将来的には公教育を通じて彼らの知性を向上させることが可能であると確信し、労働者階級を含めた人々の知性が利他的な方向へ発展した際には、共産主義的な経済社会の実現が望ましいと彼は展望したのであった。ミルは現状の経済社会では競争の役割が重要であり、これを全面的に退ける計画主義的アイデアを批判する。しかし、将来的には利他的な人間性の発展を基礎として、経済社会の構造が変化する可能性を論じたのであった。こうした彼の見解は論争を招き、現在でもその評価は分かれている。

第二の理由はミルが重要な哲学者だという点である。ミルの代表的著作には、表現の自由や個性の発現を論じた『自由論』や民主主義的な政治体制の発展のメリットやデメリットを考察した『代議制統治論』などがある。特に『経済学原理』での長期的な経済社会のビジョンは、ミルが『功利主義論』において展開した人間観に根差すものと考えられる。現状の経済社会で、利己心や競争の役割が重要である点をミルは強調する。しかし、利他的な人間性の発展をベースとした将来的な共産主義的社会を展望する際、「快樂の質的差異」を重視する彼の幸福観・人間観が、その要となっていると考えられる。

当時の背景を念頭に、ミルの長期的な経済社会のビジョンを文明観と位置付け、さらにシジウィックらと比較することで明確化することが、本研究の目的の1つである。

(2) シジウィック

第2の人物はシジウィックである。彼は功利主義の下に倫理学、経済学、政治学から構成される哲学体系を構築しようとした。ここで浮かび上がってきた課題は、彼の経済思想を歴史的文脈に引き寄せながら、さらに明確に特徴づけることである。そこで、特にミルとの対比が有効であると考えられる。

若き日のシジウィックにとって、ミルはアカデミックなスタンスからリベラルな改革を唱えるリーダーであった。しかし、シジウィックはミルの思想を単に引き継いだのではなく、むしろその問題点を乗り越えるべく、自らの思想体系を展開しようと試みた。ミルが人間性の発展を通じての将来的な経済社会の展望を提示したのに対して、シジウィックは利他的な人間性の発展というミルの要の部分に否定的である点が注目になる。これは両者の功利主義観の相違を生じさせる点でもある。ミルとシジウィックは共に代表的な古典的功利主義者に数えられる。しかし「快樂の質的差異」といった点をめぐって、両者の見解は鋭く対立する。したがって、両者の功利主義観の相違を明確にさせることで、シジウィックの経済思想や文明観の特徴をより明確に出来ると考えられる。さらにここから、19世紀半ば以降のイギリスの経済社会において生じた、経済思想の大きな変容が見出されると考えられるのである。

(3) ケインズ

3番目の人物は、ケインズである。彼は古典派経済学が大量の失業発生などに有効な処方箋を呈することができないと見切り、レッセ・フェールに表徴される経済思想からの脱却を訴えたのであった。彼は不況下の失業を非自発的失業と断じて政府介入の必要などを論じ、さらに自らの経済的主張を裏打ちする新理論の創出に腐心したのであった。

『雇用、利子および貨幣の一般理論』は経

済学界のみならず各国の経済政策運営にも影響を与えた。しかし、後に各国で財政赤字やインフレの発生などが強く懸念させるようになり、ケインズ経済学への信頼が損なわれることになった。あるいは生産論を基礎とした新古典派経済学を主流とする現代において、ケインズ経済学は周縁的地位にあると見なされる場合もある。とはいえケインズのアイデアは、マクロ経済学というスタンダードとしての地位を確立したのであった。

なぜ彼は従来と異なる新しいアイデアを展開することができたのか。この点は彼の幅広い活動や人物像などを踏まえながら先行研究で検討されている。本研究の当初の目的の1つは、特にミルやシジウィックとの比較を通じて、ケインズの経済思想・文明観の特徴をさらに明確化するというものであった。

3. 研究の方法

ミル、シジウィック、ケインズらは、単に経済学者ではなく広い意味での哲学者とも呼ぶうる人物たちであった。そして彼らの展開した経済学における、思想的・哲学的な側面に着目することで、19世紀半ばから20世紀初頭における文明観としての経済思想の変容を見出すことが出来ると考えられる。現代経済学の精緻な理論を通じて、複雑な経済的事象の解明が可能になった。とはいえ、そうした彼らの思想的・長期的なビジョンから現代の私たちが学ぶことも多く存在するというのが、本研究の背後にある認識である。

(1) 一次文献・二次文献の精査

研究方法の軸となるのは一次文献の精査である。そこでまずは、J. S. ミルとヘンリー・シジウィックの経済学に関する一次文献の精査を進めた。さらに彼らの経済思想をより正確に理解するためには、幅広く著作を検証する作業が欠かせない。したがって、時代背景に注意を払いながら、ミルおよびシジウィックのその他の一次文献の読み込みを進めた。これらの作業は、翻訳の存在しない場合はむしろ、存在する場合にも極力原文を通じて進められた。またケインズに関しては、ケインズ文書所収の手稿類の分析も進めた。

以上と並行しながら、関連する二次文献・専門研究の調査・分析も進めた。特にミルに関する最近の重要な研究として、Weinstein, D. 2007 に着目した。同著は、ミルの功利主義を理想主義として特徴づける試みであり、同著に関しては書評論文を刊行するなどした。同様にシジウィックに関する二次文献の調査・分析も進め、前述の Shultz 2004 など詳しく検証した。また、ミルとシジウィックへの鋭い示唆を含む最新の経済学史研究である、Medema, Steven G. 2009 については学術査読誌にて英文書評論文を刊行した。

(2) 学会報告等を通じての学術的交流

研究をより正確なものとして改善していくうえで、専門研究者からのフィードバックを通じてのブラッシュアップが不可欠である。こうした観点から各種学会やセミナー等でミルを中心に研究発表を行った。また本研究のテーマである文明観としての経済思想に関連する題材として、ベンサム、ハイエク、フリードマン等に関連する報告も実施した。

特に国際学会では、関連する海外の研究者から様々なフィードバックが得られた。コロラド大学での北米経済学史学会では、ミルについて報告し、論点を改善するうえで有益な意見が寄せられた。また、ニューヨーク大学での国際功利主義学会では、ベンサム、ミル、シジウィックの関連について報告し、ここでもさまざまなフィードバックが得られ、特にベンサムやシジウィックを研究する海外の研究者と知己を得ることができた。

4. 研究成果

ここでは拙稿「イギリスにおける功利主義思想の形成：経済社会における一般幸福の意義を通じて」（雑誌論文①）を随時引用しながら、研究成果全体像について記述する。

(1) J. S. ミルの経済思想

ミルに関しては特に『経済学原理』と『功利主義論』の論理的関係に着目し、経済社会の長期的ビジョンの特徴を検討した。そこで論点として浮かび上がったのは、快樂の質的差異や利他的な人間性を重視する『功利主義論』で展開されたミルの人間観が、彼の『経済学原理』にも鑄込まれていると考えられる点。そして、ここにミルの経済学の特徴の1つである経済社会の将来像に関する長期的ビジョンの哲学的考察が与えられることになったと考えられる点である。前掲拙稿では、次のように結論付けられている。

「市場での競争や資本主義自体を全面的に排斥すべきだとする社会主義者や共産主義者の主張にたいしては、ミルは決してゆずることはなかった。少なくとも現状では、社会全体をより豊かで幸福な状態へと導く原動力として、競争にかわるものは存在しないと彼は認識していたからである。とはいえ自伝のなかでも率直に語られているように、少なくとも将来の社会においては共産主義的な共同体を形成することが望ましく、現状でも一部の人々の間では実現可能であると彼が真剣に考えていたのも事実である。なぜなら、ミルにとっての真の「一般幸福」とは、単に量的な快樂の最大化によって実現されるものではなく、そこに存在する人々の人間性の発展を通じてのみ実現されるものであったからである」

ミルの『功利主義論』は問題のある著作として扱われる場合もある。すなわち、本格的な学術書というよりは、一般的な読者を対象

としたものと見なされるからである。しかし他方で、彼の人間観を経済学と重ね合わせた場合、あるいはそれをシジウィックと対比させた場合、それが彼の経済社会観において極めて重要な役割を果たしていることが明らかとなる。『功利主義論』で展開されたミルの人間観は、経済学のみならず、広くミルの著作に鑄込まれることになった、長期的な人間性の発展の可能性という根本的な彼の認識であったと考えられるのである。

(2) シジウィックの経済思想

本研究では、特にミルとの比較を念頭に、シジウィックの経済思想の特徴を検討した。そこで明らかとなったのは、第1に、シジウィックはミルの『功利主義論』に極めて否定的であるという点である。特に利他的な人間性の発展を望ましいとするミルの方針に、彼は強く異を唱えた。第2に、ある意味ミルを牽制する「実践理性の二元性」を前提としながら、シジウィックは経済や政治の問題に取り組んだと考えられる点である。すなわち将来的な人間性の発展やそれを基礎とした社会の変革といった問題については、実践的な学問分野の対象から排除すべきだと彼は論じたのであった。この点について、前掲拙稿で次のように結論付けられる。

「ミルはベンサムの功利主義を乗り越えるべく、快樂の質的差異を打ち出し、人間性の発展や利他主義を正当化したのであった。そして将来の経済社会のビジョンとして、個人主義ではなく社会主義が望ましいと彼が確信した理由も、ここにあったと考えられる。こうしたミルの立場は、その是非はさておき、厳密な功利主義からは逸脱して理想主義に接近するものであった。／他方シジウィックは、ベンサムとミルとを折衷した立場を示した。彼は道德の問題に関して、ミルに反発するかたちで、個人の内面で利己心と利他心を統合することは不可能であると見切った。ゆえに個人主義を擁護する一方、副次的要素としての社会主義的介入について論じること、厚生経済学の形成に貢献することになった。彼は価値判断の客観性を保つために、ミルの質的差異に関する議論を退け、幸福に関する帰結主義を一貫させながら、個人の道德と社会全体の関係を整合的に論じたのであった。ここにシジウィックは、古典的功利主義を完成に導いたと評価することができる。」

シジウィックは帰結主義を貫くことが、価値判断における客観性を保持するために不可欠であると見切ったのであった。したがって、彼がミルの長期的なビジョンや人間観を批判したのも、単に哲学的考察が実践的な学問体系の範疇の外に置かれるべきであると考えたからではなく、むしろ客観的な価値基準を保つことが強く彼の念頭に存在したか

らである。ミルがしばしば向かうことになった理想主義や完成主義ではなく、あくまで帰結主義的な功利主義こそが、最も信頼に値する客観的な価値判断であると彼は確信していた。このように彼の立場を特徴づけた場合、それはミルよりもベンサム の立場に近い、純粋な帰結主義と呼ぶべきものであった。

(3) ケインズその他

ケインズに関しては、一次・二次文献の調査を進め、シジウィックとの関係などで随時言及した(図書②等)。しかしながら、当初予定していたように、ミルやシジウィックとの比較においてその経済思想の特徴を位置づけるという部分に十分踏み込むことはできなかった。というのも、ミルとシジウィックを対比し、功利主義の特徴や多様性をより明確にすることが、当初考えられていたよりも重要であると認識されるようになったからである。ケインズに関する研究は、今後随時準備を進め、発表していくことにしたい。

その他関連する研究成果としては、前述のミルやシジウィックと深く関係する専門文献に関する書評論文類を刊行した。またシジウィックに関する一般向け論説を公刊し、現代の経済社会においてシジウィックや功利主義から一体何を私たちが学ぶことが出来るのかについて平易な言葉で論じた(雑誌論文②)。また2010年に拙著『功利主義と経済学：シジウィックの実践哲学の射程』(2009)が第7回経済学史学会研究奨励賞を受賞した。

(4) まとめと今後の課題

以上のように、特にミルとシジウィックの対比を中心としながら、彼らの経済思想が一種の文明観と見なされうること、そしてミルとシジウィックの間には人間観を発端として決定的な相違が存在することなどがいつそう浮き彫りとなった。そしてここから、新たな課題が浮上してきた。この点に関して、前掲拙稿で次のように論じられている。

「ある意味現代においては、功利主義は私たちの経済観の背後にある思想として、すでに広く浸透しているのかもしれない。たしかに一般幸福を社会的規範として掲げることは、私たちの経済に関する見解とうまく合致するようにも思われる。経済成長を実現すること、全体として効率的で豊かな社会を実現することは、少なくとも他の事情にして等しい限り、私たちすべてにとって望ましいと考えられるからである。これは経済の問題に照準を向ける場合、ベンサム、ミル、シジウィックを通じて形成・洗練された功利主義が、多様な価値観を包摂しうる普遍的な価値観と見なされる可能性を示唆している。しかし同時に、功利主義にその内在的な問題が備わっているとすれば、その問題が私たちの経済観に跳ね返ってくることをも意味するのかもしれない。」

シジウィックとミルの功利主義を比較した場合、ミルの理想主義的な傾向に対して、シジウィックの帰結主義的な傾向が顕著な特徴として立ち現れる。こうしたスタンスの背景として、異なる価値観を抱き得る人々によっても共有される、より客観的な価値基準をシジウィックが希求した点が重要である。さらに客観性を追求する彼の方針は、一種の「リベラリズム」と呼びうるものであり、特に経済学との関連において功利主義がリベラルな特質を有しうる可能性が浮上することになった。むしろリベラリズム自体論争の概念である。『自由論』におけるミルの立場も『隷属への道』におけるハイエクの立場もリベラリズムと呼ばれる。ロールズの如く政治的リベラリズムも存在しうる。そこでミルとシジウィックだけでなく、近代における功利主義の生みの親であるベンサムを加えることによって、功利主義とリベラリズムの関係を包括的に追求することが可能になると考えられる。こうした観点をベースとしながら、シジウィックについて扱った出版予定の論文として、「Liberal Aspects of Sidgwick's Economic Ideas」 *Liberalism and the Welfare State: from New Liberalism to Neoliberalism*, Backhouse and Nishizawa 編所収 7,300 words (2013年予定)がある。今後はこの功利主義とリベラリズムの関係を中心課題として据えながら、本研究を通じて得られた知見を発展的に展開していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件) ※書評論文等含む

- ① 中井 大介 (単著)「イギリスにおける功利主義思想の形成 ― 経済社会における一般幸福の意義を通じて ―」『社会科学研究所編 査読無 第64巻第2号 29-47頁 2013年
- ② 中井 大介 (単著)「温経知世 ヘンリー・シジウィック ― 功利主義の普遍的な価値を示した ―」『エコノミスト』エコノミスト編集部編 毎日新聞社 査読無 8月14/21日号 60-61頁 2012年
- ③ Daisuke Nakai (単著)「Medema, Steven G.: *The Hesitant Hand: Taming Self-Interest in the History of Economic Ideas*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2009, xiii+230pp」*History of Economic Thought* 査読無 54(1) pp.110-111 2012年
- ④ 中井 大介 (単著)「D. Weinstein, *Utilitarianism and New Liberalism*, Cambridge University Press, 2007, 242 pages」『イギリス理想主義研究年報』 査

〔学会発表〕(計8件) ※セミナー等含む

- ① Daisuke Nakai (単独) 「Three Dimensions of Classical Utilitarian Economic Thought: Bentham, J.S. Mill and Sidgwick」 The International Society for Utilitarian Studies 12th International Conference 2012年8月12日 New York University (アメリカ)
- ② 中井 大介 (単独) 「ハイエク『隷属への道』における経済的自由の意義」 名古屋大学大学院経済学研究科ワークショップ 2012年1月12日 名古屋大学
- ③ Daisuke Nakai (単独) 「Sidgwick and the Utilitarian Economic Thought」 International Workshop, Cambridge, LSE, and the Foundations of the Welfare State: New Liberalism to Neo-liberalism 2011年3月13日 Hitotsubashi University
- ④ 中井 大介 (単独) 「文献の電子化とリーディングに関する事例紹介」 経済学史学会 Young Scholars Seminar 2011年2月4日 近畿大学
- ⑤ 中井 大介 (単独) 「経済学における自由と競争 — ハイエク・フリードマンを足掛かりとして —」 名古屋大学大学院経済学研究科ワークショップ 2010年11月25日 名古屋大学
- ⑥ Daisuke Nakai (単独) 「Sidgwick's Utilitarianism and Practical Philosophy」 2nd International Congress Henry Sidgwick 2009年11月6日 University of Catania (イタリア)
- ⑦ Daisuke Nakai (単独) 「J. S. Mill's Utilitarianism and Practical Proposals」 36th Annual Meeting of the History of Economics Society 2009年6月28日 University of Colorado (アメリカ)
- ⑧ 中井 大介 (単独) 「ミルの経済・社会思想の功罪 — 人間性の発展をめぐる —」 名古屋大学大学院経済学研究科ワークショップ 2009年6月5日 名古屋大学

〔図書〕(計4件) ※既刊の再録等を含む

- ① 中井 大介 (単著) 昭和堂 「マーシャル『経済学原理』における人間観: J.S. ミルとの関連から」 『マルサス・ミル・マーシャル』 柳田・諸泉・近藤編所収 20,300字 (2013年刊行予定)
- ② 中井 大介 (単著) ミネルヴァ書房 「シジウィックとケンブリッジ学派の誕生」 『創設期の厚生経済学と福祉国家』 西澤・小峯編所収 23-57頁 (2013年刊行予定)
※一部拙著『功利主義と経済学: シジウィックの実践経済学の射程』(2009年刊)からの再構成含む

- ③ 中井 大介 (単著) 昭和堂 「経済学方法論争とシジウィック『経済学原理』『イギリス経済学における方法論の展開 — 帰納法と演繹法 —』 只腰・佐々木編所収 226-256頁 2010年

※一部拙著『功利主義と経済学: シジウィックの実践経済学の射程』(2009年刊)からの再構成含む

- ④ 中井 大介 (単著) 日本経済評論社 「シジウィック — 実践哲学としての倫理学・経済学・政治学 —」 『市場社会論のケンブリッジ的展開』 平井編所収 21-46頁 2009年

※拙稿「シジウィックの社会哲学」『生駒経済論叢』2008を加筆修正のうえ再録

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中井 大介 (NAKAI DAISUKE)
近畿大学・経済学部・准教授
研究者番号: 70454634

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: